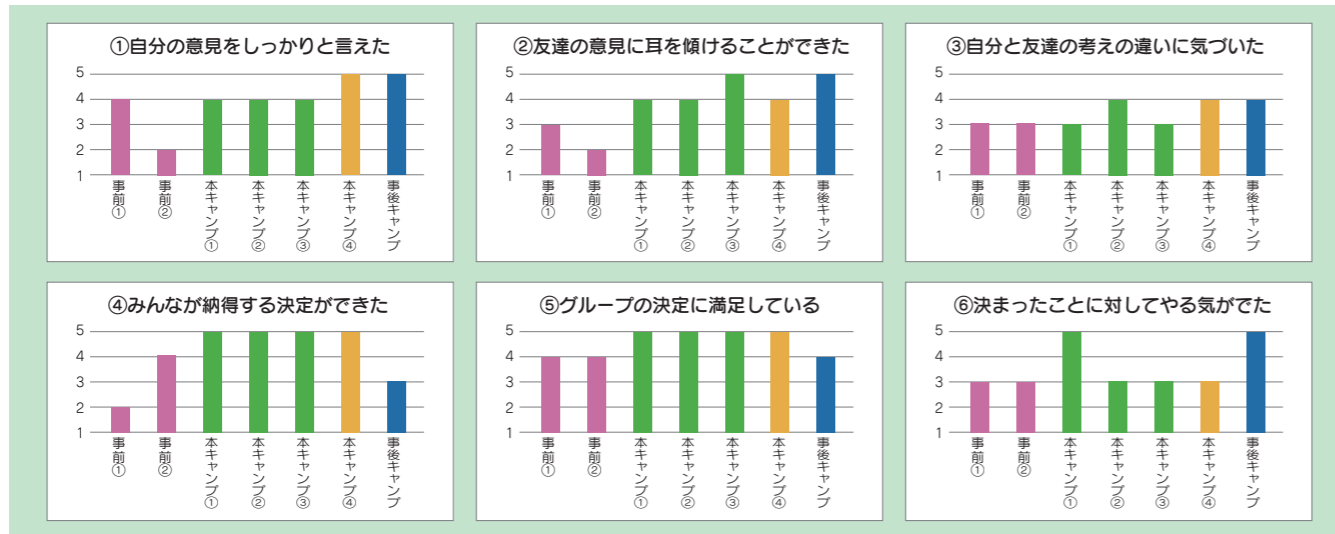


3. 参加児童の変容

対象児 A (小学生・女子)

A児は、事前キャンプ初日に「母親が勝手に申し込んだ」とキャンプ参加に否定的な発言をしている姿が見られた。また、ファーストステージのふりかえりでは自己肯定感が低く、参加者に対して強い言葉で当たっていた。ステージが進むにつれ、「自分の意見を伝える」「友達の意見に耳を傾ける」といった項目で肯定的な回答が見られるようになった。グループで決めた活動にも納得して参加し、楽しむ様子が見られた。

ア 自己評価



イ 自由記述

- 1日目：火おこしをうまくしたり、カレーをうまくつくったりしたい。
- 2日目：山登りで疲れたので、本キャンプに向けてトレーニングしたい。
- 3日目：自分の意見を伝え、決まったことを成功させたい。
- 4日目：協力して焼きそばやオリエンテーションができた。
- 5日目：何度かやった野外炊事が協力してうまくできるようになった。
- 6日目：野外炊事でうまくアレンジ料理ができなかったので次はがんばりたい。
- 7日目：これからはみんなと協力していろいろなことを成功させていきたい。

1か月後 (保護者アンケート)

- ・普段はあまり自分の話をしないが、キャンプの話は積極的にしていた。
- ・キャンプ後は、学校での出来事など話すようになった。
- ・母親の問いかけにも積極的に答えるようになった。
- ・12月にも「お久しぶりキャンプをやりたい」と話していた。

考察

- ・項目①、②は日が経過することに数値の向上が見られたことからグループ内の話し合いで進んで発言したり、友達の意見を聞いたりすることができるようになったことがうかがえる。
- ・項目④・⑤においては、比較的高い水準で推移していることからグループへの所属意識が高いことがうかがえる。
- ・自由記述ではキャンプが進むにつれ「協力」という言葉を使うようになり、プログラムを通し他者と協力する場面を多く経験できた結果だと推察される。
- ・保護者アンケートの結果からも自分の思いや考えを言葉にできるようになったことがうかがえる。

(2)あかぎ無限大キャンプにおける社会的能力の変容

國學院大學 准教授 青木 康太郎

1.はじめに

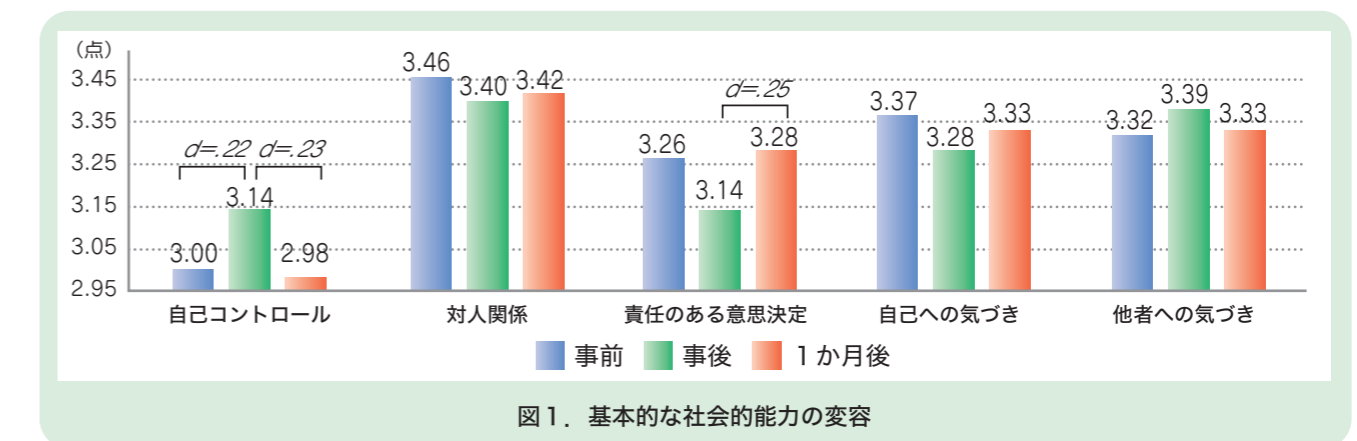
本研究では、あかぎ無限大キャンプで目指す子供像を踏まえ、参加者の社会的能力の変容に着目し、教育効果を検証することとした。

社会的能力の測定は、田中芳幸ら(2011)が開発した「小学生版「社会性と情動」尺度」のうち、基礎的な社会的能力である「自己コントロール」「対人関係」「責任のある意思決定」「自己への気づき」「他者への気づき」を用いて、キャンプの事前、事後、1か月後に調査を実施した。なお、事後調査については、プログラムの都合上、調査票を持ち帰って自宅で回答してもらい、1か月後の事後キャンプで回収することとした。

分析に当たっては、基礎的な社会的能力の各因子の平均(M)と標準偏差(SD)を算出した後、測定時期を要因とした一要因分散分析を行った。また、測定時期間の効果量(cohen's d)を算出し、教育効果の大きさも併せて確認した。

2.分析結果

基礎的な社会的能力(自己コントロール、対人関係、責任のある意思決定、自己への気づき、他者への気づき)の平均値(M)の推移は図1のとおりである。分析の結果、すべての因子に測定時期の主効果に有意差は認められなかった。そこで、各測定時期間の効果量(効果量の目安 .20=小 .50=中 .80=大)をみたところ、「自己コントロール」はキャンプの事前-事後の間に小程度の効果量が認められ、「自己コントロール」の向上効果が示唆されたものの、事後-1か月後の間にも小程度の効果量が認められことから、「自己コントロール」の向上は1か月後まで持続していないということが分かった。



3.まとめ

本研究では、基礎的な社会的能力に有意な向上は認められなかったものの、キャンプの事前-事後の効果量をみると「自己コントロール」に小さな効果が認められたことから、あかぎ無限大キャンプでは、基礎的な社会的能力のうち、「自己コントロール」が向上する可能性が示唆された。

今後は、あかぎ無限大キャンプの体験にも着目し、それらの体験が参加者の社会的能力の変容にどういった影響を及ぼすのかについて検証し、あかぎ無限大キャンプの成果や課題を詳細に分析していく必要と考えている。